

Judith Wright の詩と Pioneer Women

(3) *The Moving Image* とオーストラリア性

Judith Wright's Poems and Pioneer Women

(3) *The Moving Image* and Australia

(2000年3月31日受理)

橋内幸子
Sachiko Hashiuchi

Key words : Judith Wright, Poiner women, オーストラリア性

I. はじめに

The Moving Image は、1946年に Judith Wright が出版した最初の詩集である。その後、*Collected Poems 1942-1985* に収められた詩は、この詩集からは、22編になっている。そして、その選択は題材とテーマの点から見れば、首肯できるものであろう。何よりも、Judith Wright が一貫して取り組んでいるテーマを支える要素、つまり、オーストラリアをめぐるさまざまなモチーフと視点が最初から展開されているからである。それは、オーストラリアの歴史、自然、現代が抱える世界規模の課題、そして、自伝的側面からの思索、などの、いわば多様な土壌からの収穫ともいえる。

Judith Wright は、1929年から1933年にかけて、Armidale の New England Girls School に通い、8編の詩を *NEGS Chronicle* に投稿した。1934年から1936年の間、University of Sydney の学生（正式な大学入学許可は得ていない）になり、大学新聞の編集にも参加した。1937年から一年間、イングランド、スコットランド、ドイツ、フランス、スイス、などを旅行し、セイロンを経て帰国した。1938年から1941年にかけて、シドニーで速記と秘書の仕事をしつつ、詩作を続けたが、1941年に、故郷の Wollomombi に戻った。そして、自作の詩の投稿先である Meanjin Papers の編集者の家で、生涯のパートナーになる哲学者、Jack Mckinney に会う。1943年から1944年にかけて、University of Queensland で、事務の仕事をしつつ、Meanjin Papers の発行にも携わる。1945年に、仕事先は同大学の統計関係に変わり、1946年に、この *The Moving Image* をメルボルンの Meanjin Press から出した。ちょうどこの時期に、Judith Wright は、後の *The Generations of Men* の資料、祖父の Albert Wright の25冊の日記を読んでいる。Wright 家はいわば、名門で、Judith の父 Phillip は、裕福な牧畜業者、及びビジネスマンとして成功し、University of New England の後援者に、そして後に学長にまでなっている。しかし、Judith にとって、祖父母の生きた時代こそ、オーストラリア性がそのまま実感できた時期だったのである。⁽¹⁾

Armidale を中心とするニュー・イングランドの自然、開拓移民の実態の記録、ヨーロッパ旅行による文化的洗礼、哲学的人間との出会い、そして、第二次世界大戦の悲劇。テーマは全て、彼女の実人生から得られている。そのため、抽象観念の世界にのみ浸ることなく、鮮明なイメージを作り上げることができたといえる。そこで、本稿では、*The Moving Image* に見られる、Judith Wright の詩の特質を順番にたどってみることにする。⁽²⁾

Ⅱ．時にまつわる記憶

‘The Moving Image’ というタイトルは、プラトンの言葉、「時間は永遠の動く影である」(Time is a moving image of eternity) に由来する。過去、現在、未来、と続く「時」の区分は、人間が便宜的に作ったものにすぎない。その「時」に、始まりや終わりをつけ、時代としてまとめ、時計を使って計測することは、人間の意識に、明確な輪郭を持つものを残そうとする試みである。冒頭に置かれた“The Moving Image”は、人間と「時」の関係を、調和と不調和の様相において瞑想的に描いたものである。

詩の前半部分は、時間の指針となる時計の進度に合わせて、人間が生きていける時の調和的世界をイメージ化した部分から始まる。人間が「時」と格闘することがない場合、振り返ってみる過去は、短くも長くも感じられる。また、周囲の自然も、人間の精神状態を反映して、「海に臨む緑の草地の斜面」(a sweet slope of grass edged with the sea) や、「黄金の衣をまとった木」(a tree dressed in gold) が、その世界を象徴している。つまり、一言で表すと、「子供が遊ぶ緑あふれる世界」(the green world of a child) である。しかし、現代の人間は、共同体の一体化をはずれて、それぞれの緊張した「時」を生きる運命にある。

And the clock begins to race.

We are caught in the endless circle of time and star
that never chime with the blood; we weary, we grow lame,
stumbling after their incessant pace
that slackens for us only when we are
caught deep in sleep, or music, or a lover’s face.⁽³⁾

「時」は、その歩みを速め、人間は終わりのない「時」と星の輪に巻き込まれる。そこでは、人間の「血」の伝える鼓動とは、ともに相いれないリズムが刻まれている。人間は疲弊し、足をひきづりつつ進まざるをえない。

そして、視点を変えるべく、空から下界を眺めた時の直観と、狂気の男 Tom に体現される人間の状況が、後半の部分に示される。飛行場からは土ほこり(dust)が吹き寄せられ、口や目に入り、手にもその感触が残る。かつて、神秘の谷であった場所はいまや荒涼として、草も枯れ、砂から成

る地図のようにやせている。この部分には、第二次世界大戦の戦闘機が発着したり、戦時下で荒れ果てた土地の様子を思わせるものがある。「高みから眺めると、この世は邪悪で、からっぽの頭のように小さい」(Looking from so high the world is evil and small / like a dried head)。

その荒れた地にいるあわれな狂人 Tom of Bedlam には、「熱い血潮を通して、命が雷のようにそそぎこみ」(through whose feverish blood life poured like thunder), その狂気のゆえに、原初的な人間にのみある力が備わっている。狂人として、社会の常識的な枠の中に押し込められない Tom の魂には、地上のものにも、宇宙のものにもそのまま同化できる。Judith Wright にとって、現代に生きることは、絶えず風化するものを受け継ぐことである。つまり、「我々は一握りの土ほこりと石のかけらを引き継いだ」(We inherit a handful of dust and a fragment of stone) のである。しかし、周囲の音に耳をすませば、生きとし生けるものの音が聞こえる。たとえ、音にならないものでも、その息吹は感じることができる、と、詩行は続く。Judith Wright は、このような展開を見せるだけでも、他の現代詩人とは一線を画しているといえよう。絶望と悲惨の極にあろうとも、最後に自我をよりどころに、肯定の境地へと転化していくことが、その特徴であろう。

I am the maker. I have made both time and fear,
knowing that to yield to either is to be dead.
All that is real is to live, to desire, to be,
till I say to the child I was, "It is this; it is here.
In the doomed cell I have found love's whole eternity."⁽⁴⁾

生きること、望むこと、存在すること、そして、運命の中にあっても、愛の永続性を見つけることこそ、人間の本来の姿である。Judith Wright の言葉は、予言者の響きを帯びつつ、時を旅する人間の意識を癒していく。

その Judith Wright の、「時」に関するテーマは、オーストラリアの歴史に焦点があてられる時こそ、詩人としての洞察と言葉の意味の重さが明らかになる。“Remittance Man” は、イギリス本国からオーストラリアの自然の中に追放された男を、軽妙さと哀切をもって描いたものである。オーストラリアは、開拓民として来た人々は別として、罪の軽重を問わずに、イギリスから流刑者達が運ばれた地である。そして、社会の規範の中におさまらない人々達が、この乾燥した未踏の大地を、自由に歩き回ったことも多かった。故郷のイギリスで金使いの荒い放蕩を重ね、財産の相続権を放棄する代わりに、お金を送金してもらう男がいた。この男、この経緯を軽くやり過ごし、堅苦しい周囲の人々から逃れて、いかに自由になれたかについては、自分でもびっくりするくらいだった。彼は、「指の間から、命を除いてあらゆるものが滑り落ちるままにさせた」(let everything but life slip through his fingers)。彼は、この風土と人々に同化していった。そして、「残酷な贖罪のヤギが放たれた聖なる国は、／勤勉なアリに磨かれた彼の骨の周りで、その輝きを消していった。」

That harsh biblical country of the scapegoat
closed its magnificence finally around his bones
polished by diligent ants. The squire his brother,
presuming death, sighed over the documents,
and lifting his eyes across the inherited garden
let a vague pity blur the formal roses. ⁽⁵⁾

彼の兄弟である大地主は、彼の死を推しはかり、溜め息をついた。相続した家の庭から目を上げながら、漠然とした憐れみの情のために、庭に咲く整然としたバラの花がかすんで見えた。このような話や、人間像は、昔はごくありふれたものであったに違いない。遠く故国を離れて、新天地の土になること。しがらみを離れ、家族を後にして、自由気まま、しかし、やはり、どこかに故郷を引きずっている人間達。その姿は、次の、“Country Town”にもさまよい出ている。

「故国を追放された人々が、流浪の身でさすらう、森の多い過酷な地」(the sad green enemy country of their exiles)であるオーストラリアには、さまざまな群像がやって来ては、その地で命を終えていった。なじみのない風土でも、見聞きするものが、故郷で知っていたものに思えてしまい、実体のない恐怖に怯えることもあった。特に、犯罪人にとっては、死、強制労働、捕らわれの身、などといった身近にあるものが、その恐怖感を増幅させていったのである。アイルランドやスコットランドの民俗の中に、「バンシー」(banshee)がある。妖精の一種であるが、その姿に遭遇したら、自分を含めて誰かが死ぬという存在である。いわば、民衆にとっての「死神」である。オーストラリア特有の野犬であるディンゴの、夜吠える声が、そのバンシーの声に聞こえ、流浪の身には、ますます恐怖がつる。

The nights were cold, shepherding; and the dingoes
bawling like banshees in the hills, the mist coming over
from eastward chilled them. Beside the fire in the hut
their pannikin of rum filled them with songs
that were their tears for Devonshire and Ireland
and chains and whips and soldiers. ⁽⁶⁾

乾燥しきった気候、酸化鉄の混じる赤い土、見慣れない動植物、そして、アボリジニーという原住民の姿。それでも、この地を踏んだ人々は、それぞれの命の軌跡を民衆の記録に残すことになる。

Remember Thunderbolt, buried under the air-raid trenches.
Remember the bearded men singing of exile.
Remember the shepherds under their strange stars. ⁽⁷⁾

当初、イギリスを始め、ヨーロッパの各地から、理由のいかんを問わず、やって来た人々は、その人生を自分なりの生き方をするだけであっても、オーストラリアの国民性を形成するための指針を残した。そのことだけでも、彼らの存在意義はあったのではないか。

次に「戦い」という、「時」の記憶としては、原住民のアボリジニーと第一次・第二次世界大戦がある。アボリジニーの大量虐殺という、過去の歴史的事実については、“Nigger’s Leap, New England”において、Judith Wrightの姿勢が明白にされる。土地所有の概念を持たず、Rainbow Serpentを中心とする創世神話を信じ、文字を持たないアボリジニーは、船でやって来た人々によって、black peopleと呼ばれ、殺され、内陸へと追いやられていった。詩人の故郷 New Englandでも、その虐殺の歴史がある。かつて、その地の崖から、追いつめられた black people が身を投げ、集団自殺していった。

be dark, O lonely air.

Make a cold quilt across the bone and skull
that screamed falling in flesh from the lipped cliff
and then were silent, waiting for the flies. ⁽⁸⁾

アボリジニーの権利回復について、Judith Wrightは詩のテーマに選ぶのみならず、その運動にも参加している。これは、詩人としてというより、一個人としての姿勢である。その根底には、あらゆる人間は、お互いつながっているという意識がある。彼女にとって、「全ての人間は、結局一人の人間である」(O all men are one man at last) からである。

また、現代における「戦い」をテーマとしたものには、“The Company of Lovers”がある。戦争と戦死で引き裂かれる恋人たち、そして、普遍的な人間的感情を描いたものではあるが、オーストラリア特有の歴史をテーマとしたものと比べると、喚起されるイメージは弱い。同じテーマを取り扱っていても、そこにオーストラリアの歴史と風土が関わると、俄然その情景は力強く迫ってくるものがある。“Soldier’s Farm”が、それである。おそらく、第一次大戦から帰国したであろう兵士⁽⁶⁾が、畑を耕し、作物を作る。再び、オーストラリアの土に触れるために、「彼は、運良く生きることしか望まなかった」のである。

He asked for nothing but the luck to live,
so now his willing blood moves in these trees
that hold his heart up sunwards with their arms.
The mists dissolve at morning like his dreams
and the creek answers light as once his eyes
and yet he left here nothing but his love. ⁽⁹⁾

彼の血が周囲の木々の中にも流れ、心が腕とともに陽の光に向かう。小川は、かつての彼の目のように、輝いている。そして、その彼が残したものは、自分の愛のみであった。オーストラリア大陸の海岸に沿った土地は肥沃で、採れる作物も大きい。戦争が人間を含めて、全ての物を破壊するのに対して、耕作は命あるものを生み出す。心を込めて土を耕した男が残したものは、ものを作り出すこと、つまり、生命の破壊の極にある、生命への愛であった。

Ⅲ. 自然と人間

オーストラリアの自然は、二極化している。つまり、乾燥し、赤土から砂漠の砂にいたるまでの違いはあるものの、不毛で、人間の生活には向かない内陸部が、国土の大部分を占めている。その一方で、大陸の沿岸部は、亜熱帯気候から地中海性気候まで、緯度によって異なるが、全体的に肥沃な土壤に恵まれ、収穫される作物も大きく、人間は快適な生活を約束されている。しかし、オーストラリア独自の生態系のバランスを保持すること、また、世界規模で取り組むべき環境問題という、現代世界共通の問題を解決する、という課題は、Judith Wrightにとっても、大きな関心事であった。

生態系のバランスは、ほんのわずかな要素が関係しても、容易にくずれてしまう。その意味で、現代人は、自然をありのままに保全しようとする限りの試みはするものの、生態系の均衡が、どの程度でとれなくなるかのリサーチが慎重に実施されないと、人間中心の方策がいきすぎて、後のまつりになることが多い。オーストラリアでも、すでに絶滅した動植物は、その意味で、皮肉なことではあるが、注目される存在である。オーストラリアの赤い大地に生きる野犬、ディンゴも、人間の近くににいるものの、やはり、家畜を襲い、人間生活に害を及ぼすため、捕らえられ、殺される運命にあった。しかし、Judith Wrightが、この詩集で発表した“Trapped Dingo”は、たちまちのうちに、批評家達から高い評価を得た。それは、まさしく、オーストラリアでしか生まれぬ詩であったからであり、その力強い抽出の仕方は、神話のレベルにまで広がっていたからである。

この「罠にかかったディンゴ」は、人間の仕掛けた鉄製の罠にかかって、身をよじり、夜のしじまに絶望の声を放っているところから始まる。詩人は、ディンゴに対して、「おまえ」(you)と呼びかけて、その苦痛、恐怖、怒り、などを詩行に詠い込んでいく。かつては、広い大地を走り回り、自由に生きてきたディンゴは、原初的な自然の支配者であり、「野生の詩人」である。

I heard you, desperate poet. Did you hear
my silent voice take up the cry? — replying
Achilles is overcome, and Hector dead,
and clay stops many a warrior's mouth, wild singer. ⁽¹⁰⁾

致命傷を負ったディンゴの絶望の声に、詩人は憐れみながら、その昔、アキレスによって、トロイ

アの王子ヘクトールが殺されたこと、そして、土くれが多くの勇士の口を封じてきたことを、声なき声で語りかける。ここで、野生のディンゴは、神話の世界に引き寄せられる。やがて、朝の太陽が昇り、「死が、おまえが詠ってきた詩の調べを止め」(death ends the verse you chanted)、彼は大地に横たわる。つまり、「挽歌を好み、詠ってきたものが殺されて、血のベールをかけられる」(The lover, the maker of elegies is slain, / and veiled with blood) のである。

そして、人間の世界よりも、自然や動物により近い生活を送る人間は、その生活が孤独で、過酷であればあるほど、狂気に近づく。「牛追い」("Bullocky") では、多くの牛を追いつつ、日照りに渴き、冷たい雨に凍え、長い間、自然の中で暮らしてきた男が、ついに狂ったまま、土に帰っていく。ごく自然に日々を送っていた牛追いではあるが、ついに幻想を見るようになる。彼の目に、誰もいないはずの道に、悪霊や天使の姿が映る。長い緊張を伴う旅の果てに、狂気による啓示が、夢幻のように浮かぶ。それは、人間というものが、仲間や強い信念の支えがない時は、長い孤独や苦闘には耐えられないことを意味する。この詩では、その牛追いの姿が、皮肉なことに、旧約聖書の「出エジプト記」のモーゼに擬せられているのである。

All the long straining journey grew
a mad apocalyptic dream,
and he old Moses, and the slaves
his suffering and stubborn team. ⁽¹¹⁾

薄暗い黄昏時、木々の下に張ったテントの下で、彼は祈りや予言を繰り返した。キャンプ・ファイヤーの赤々ともえる炎の向こうに、星明かりのみが見える暗闇に包まれて、彼の耳には、牛の首についている鈴が、はかなげで澄んだ音色を響かせていた。彼の死後、牛追いの車が通った道の上に草が生い茂り、鋤が草の下に埋もれていた彼の骨にぶつかる。牛の群れが通り過ぎていった、坂道のあった斜面にはブドウ園が造られている。

Grass is across the waggon-tracks,
and plough strikes bone beneath the grass,
and vineyards cover all the slopes
where the dead teams were used to pass. ⁽¹²⁾

彼は、オーストラリアの広大な大地を移動することに疲れ、苦闘の一生を送った。Judith Wright は、その名もない男の生涯と死に、共感をこめて肯定的な意義を与えている。それは、普通の人間よりも、過酷な人生を送った者だけが受けるに値する賛辞である。

O vine, grow close upon that bone

and hold it with your rooted hand.
 The prophet Moses feeds the grape,
 and fruitful is the Promised Land. ⁽¹³⁾

詩人は、ブドウの木に呼びかけて、言う。その男の骨の上近くで大きくなるように、と。そして、その手のような根で、その骨をしっかりと抱き止めているように、とも言っている。その男は、モーゼのように人民ならぬ牛の群れを連れ、長年、流浪したが、その「約束の地」は、今や豊饒の地であるからである。人間は、個人としての人生を終わっても、その軌跡は、必ず他の人間に関係しており、また、縁もゆかりもないところで、つながっていく。その意味で、自然と人間が織り成す結果は、うかがい知れないものがあるといえよう。

IV. Judith Wright と故郷としての New England

普通、詩人にとっての故郷は、二つの意義がある。目が広い世界に向かう、または、周囲の価値観との相違により反発の対象になっている、という一面がまず挙げられる。これから、詩人として出発しようとする若い時代の詩人に、その傾向が強い。一方、歳を重ね、さまざまな経験を積んだ後、詩人にとっての故郷は、反発はあるものの、郷愁と愛着の対象に変化している場合がよく見かけられる。Judith Wright にとっての故郷、オーストラリアの片田舎である Armidale、及び New England は、彼女の若い頃からの一貫した、詩のモチーフであった。イギリスからの開拓移民の五代目としての彼女にとって、その地には、先祖の人々の人生がそのまま、刻まれていたからである。そこでは、オーストラリアの歴史と人々の人生が、良い意味でも悪い意味でも見てとれた。また、彼女は、昔と変わらぬ自然の中に、オーストラリアの風土が持つ独自性を見分け、それを詩の言葉に変容させて、詩行に封印していくことができたのである。

“For New England” は、故郷を離れて他の地方に滞在していた詩人が、瞑想的に自分自身のノスタルジアを表現したものである。脳裏に去来する懐かしい風景、とりわけ、数種類の木や植物、そしてその木々の間を吹き抜ける風、などが、詩人の思いを伝えている。「New England の木々よ、南にいる私に風を送り、初雪が近いことを伝えておくれ」(Your trees, … / blow all one way to me, this southern weather / that smells of early snow), という詩行がその始まりである。記憶の中の家は、スズカケや栗の木に囲まれ、外からは風が吹き寄せている。故郷の彼女は、「ここにいるわ」と言った。遠くの北の方には、干ばつで荒涼とした地平線が見える。鳥のようなその土地に木を植え、それを故郷の彼女の周りに引き寄せる。そうすれば、「私の心の中に、現実の木の姿と、私の願いの中の木が重なって見える」(Therefore I find in me the double tree)。さらに、故郷への思いに浸る詩人は、出帆する船の姿を眺める。風に翻るその帆が、「あなたのことは忘れない」というメッセージを送っているかのように見える。そして、ポプラの木がまるで、炎に包まれているかと思うと、それは、赤い羽を羽ばたかせて飛び立つ鳥、ガラの群れである。オーストラリアの鳥達も、虹

色の羽を身にまとうインコを始め、色鮮やかな羽を持つ鳥が多い。その鮮やかさは、他の大陸には見られないものである。

この詩は、次に、詩人の瞑想の中での情景という構図を使い、自然と自己が混然一体となった様子を力強く描く。

Many roads meet here
in me, the traveller and the ways I travel.
All the hill's gathered waters feed my seas
who am the swimmer and the mountain river;
and the long slope's concurrence is my flesh
who am the gazer and the land I stare on;
and dogwood blooms within my winter blood,
and orchards fruit in me and need no season. ⁽¹⁴⁾

これらは全て、自己の脳裏で輝く故郷の自然であり、人間の生命に呼応するものである。

しかし、自分のいる場所は故郷ではない、という突然の自覚が、ギリシア神話のユリシーズの流浪を詩行の中に引き込むのである。「おまえの故郷はどこなのか、ユリシーズよ」(Where's home, Ulysses?) で始まるスタンザでは、流浪中は異邦人として、そして、ようやく故郷に帰り、命を終えるときも疎外されて死んでいった、ユリシーズの姿が描かれる。詩人は、今、この異郷の地に吹く風に呼びかける。ろうそくのようなキングサリが、故郷のハナミズキと一つの炎の中に溶け込んで、思い出を赤々と照らして欲しい、そして、私の野原が春のように緑に輝くように、と。

一方、“South of My Days” には、自然の詳細な描写や神話的連想よりも、具体的な地名や人間の姿が浮かび上がる。この詩は、Judith Wright が Brisbane に滞在していた時に書かれた。より北の海岸部に位置し、気候的にトロピカルな Brisbane の風景の前にして、故郷を思う時、詩人の脳裏に浮かび上がることは、まず、両者の違いと懐かしい人々の群像であった。故郷 Armidale は、寒暖の差の大きい内陸部にあり、台地という地勢にある

South of my day's circle, part of my blood's country,
rises that tableland, high delicate outline
of bony slopes wincing under the winter,
low trees blue-leaved and olive, outcropping granite ——
clean, lean, hungry country. The creek's leaf-silenced,
willow-choked, the slope a tangle of medlar and crabapple
branching over and under, blotched with a green lichen;
and old cottage lurches in for shelter. ⁽¹⁵⁾

「清らかで、不毛の、やせた田舎」(clean, lean, hungry country)であっても、自分の血がかよう地。骨のようにゴツゴツした斜面が、冬の寒さにたじろぐように見える。しかし、灌木とオリーブの木が生え、セイヨウカリンと野生リンゴが枝を伸ばし、その下には緑の苔がはりついている。そして、その斜面には、古い小屋が傾いているように建っている。

風土と風景には、それにふさわしい群像がいるのは、当然である。まず、「骨の周りに、70年の物語をまとわりつかせている」(Seventy years of stories he clutches round his bones) 歳老いた Dan. 干ばつで、ハンター川も川底が見えた年、畑仕事用の馬車に乗ったまま死んだ黄色人種の少年。そして、あの、伝説的人物、Thunderbolt。いずれも、その風土にふさわしい人々である。

South of my day's circle

I know it dark against the stars, the high lean country
full of old stories that still go walking in my sleep. ⁽¹⁶⁾

Brisbane で、詩の言葉と向き合う夜、南のやせた高地の故郷では、暗い夜に星が瞬く。古い物語が人々の心に生き、詩人の夢の中にも、懐かしい人々が歩きまわっている。Armidale とは、そのような地である。

V. 終 わ り に

詩集 *The Moving Image* には、上記の詩作品に加えて、あと12編の詩が、*Collected Poems* に収められている。子細に検討すれば、それぞれの詩には、Judith Wright の詩が持つ魅力が見てとれる。しかし、この詩人の特質を端的に示しているものは、やはり引用した作品群である。

詩のモチーフとして、オーストラリア全体を見た場合、他の国とはきわだって異なる特質があるとは、すでに述べた。まず、時をめぐる事柄、つまり、オーストラリアの歴史にまつわるものであるが、Judith Wright は、過去と現在をつなぐべく、人間像を中心に描く方針の詩人である。最初は流刑の地、次に開拓移民の国、そして、未来への可能性をかけてやって来る現代の移民の地、であるオーストラリア像がある。“Remittance Man” においては、故国と家族から追放された男でもこの地では、それなりの生き方が許された。“Country Town” では、故国への思いをもちつつ、豊かな自然の中で生き抜き、オーストラリアの土となった群像が現れる。世界規模の戦争で、多くの命が失われるのを見た兵士は、故国オーストラリアに帰って、ひたすら土地を耕し、自分の愛の結晶ともいえる農園を残した。“Soldier's Farm” である。一方、土地所有への移民達の執着は、原住民アボリジニーの大量虐殺を招いた。“Nigger's Leap, New England” では、その情景の一部が垣間見られる。

詩人にとって、オーストラリアは、まず、その自然が詩のテーマの対象となるのも当然である。その独自の生態系は、色鮮やかな動植物によって特徴づけられ、詩全体のカラートーンを決定して

いる場合が多いが、ここで、取り挙げたのは、野犬のディンゴと牛追いの生活である。両者とも、神話や聖書の人物のアリユージョンが使われ、ディンゴはより人間的なイメージを付加されたり、過酷な自然と格闘した一人の男の結末が語られる。

そして、Judith Wrightにとって、故郷のNew England地方は、まさにオーストラリアそのものを示すための最適の場所であった。そこでは、身近のあるものを詩行に書いても、国としての歴史、自然、そして、人々を、そのまま、表現できたからである。“For New England”も“South of My Days”も、その意味では、単なるノスタルジアの吐露ではない。そこには、確かにオーストラリア性が凝縮して、点在していることが歴然としているからである。

Notes

- 1) Veronica Brady, *South of My Days: A Biography of Judith Wright* (Angus & Robertson, 1988), pp. 59-83を参照。
- 2) Shirley Walker, *Flame and Shadow: A Study of Judith Wright's Poetry* (University of Queensland Press, 1991), pp. 18-38を参照。
- 3) Judith Wright, *Collected Poems* (Angus & Robertson, 1994), p. 3.
- 4) *Ibid.*, p. 4.
- 5) *Ibid.*, p. 11.
- 6) *Ibid.*, p. 13.
- 7) *Ibid.*, p. 14.
- 8) *Ibid.*, p. 15.
- 9) *Ibid.*, p. 12.
- 10) *Ibid.*, p. 9.
- 11) *Ibid.*, p. 17.
- 12) *Loc. cit.*
- 13) *Loc. cit.*
- 14) Judith Wright *op. cit.*, p. 23.
- 15) *Ibid.*, p. 20.
- 16) *Ibid.*, p. 21.

Bibliography

- 1) Bennett, Tony et. al. eds. *Celebrating the Nation: A Critical Study of Australia's Bicentenary*, St. Leonards: Allen & Unwin, 1992.
- 2) Brady, Veronica. *South of My Days: A Biography of Judith Wright*, Auckland: Angus & Robertson,

- 1998.
- 3) Cathcart, Michael. *Manning Clark's History of Australia*, Melbourne: Melbourne University Press, 1993.
 - 4) N. グリーブ他編, 加藤愛子訳。『フェミニズムとオーストラリア』, 東京: 勁草書房, 1986。
 - 5) Hampton, Susan & Kate Llewellyn eds. *The Penguin Book of Austrarian Women Poets*, Ringwood: Penguin Books Australia, 1986.
 - 6) Hergenhan, Laurie ed. *The Penguin New Literary History of Australia*, Ringwood: Penguin Books Australia, 1988.
 - 7) Isaacs, Jeniffer. *Pioneer Women of the Bush and Outback*. Smithfield: Gary Allen, 1990.
 - 8) 石橋百代。『オーストラリアの女性』, 東京: ドメス出版, 1997。
 - 9) Lever, Susan ed. *The Oxford Book of Australian Women's Verse*, Melbourne: OUP, 1995.
 - 10) J. マーチン著, 古沢みよ訳。『オーストラリアの移民政策』, 東京: 勁草書房, 1987。
 - 11) Rowe, Noel. *Modern Australian Poets*, Sydney: OUP, 1994.
 - 12) 関根政美, 他著。『概説オーストラリア史』, 東京: 有斐閣, 1988。
 - 13) C. シェリントン著, 加茂恵津子訳。『オーストラリアの移民』, 東京: 勁草書房, 1985。
 - 14) Page, Geoff. *A Reader's Guide to Contemporary Australian Poetry*, St. Lucia: University of Queensland Press, 1995.
 - 15) Strauss, Jennifer. *The Oxford Book of Australian Love Poems*, Melbourne: OUP, 1993.
 - 16) Tranter, John & Philip Mead eds. *The Penguin Book of Modern Australian Poetry*, Ringwood: Penguin Books Australia, 1991.
 - 17) Walker, Shirley. *Flame and Shadow: A Study of Judith Wright's Poetry*, St. Lucia: University of Queensland Press, 1991.
 - 18) Wilde, William, et. al. eds. *The Oxford Companion to Australian Literature*, 2nd edition, Oxford: OUP, 1994.
 - 19) Wright, Judith. *Collected Poems 1942-1985*. Auckland: Angus & Robertson, 1994.
 - 20) Wright, Judith. *The Generation of Men*, Sydney: An Imprint Book, 1995.